マイノリティとメディア
～テレビにおける障害者の表象を例に～

政治経済学部　国際政治経済学科
塩川菜摘

概要

「ダイバーシティ」という言葉が世間に浸透しつつあるが、日本は多様性を受け入れるマイノリティの暮らしやすい国とはまだまだ言い難い。人種、国籍、宗教、障害、性別、性的指向、社会的地位などの違いにより、生きづらさを感じている人々は、社会の陰に隠れて生活している。本論文では、社会的弱者やマイノリティの問題提起をマスメディアがいかにして担うべきであるか考察することを目的とする。

マイノリティの中では日本のメディアで最も目にする機会の多い障害者。本論文ではテレビ媒体における彼らの描かれ方を分析していく。その過程でマイノリティをコンテンツとして扱う際の問題を明らかにし、「マイノリティの適切な取り上げ方とは何か」をリサーチ・クエスチョンとして、弱者に寄り添う新たなマスメディアの形を考える。

「障害者」という大きなテーマを掲げた番組として、日本テレビ「24時間テレビ」とNHK「バリバラ」の2つを分析対象とした。先行研究の分析手法を参考に、BBC Producers' Guidelines、障害者の権利に関する条約第8条：意識の向上、カルチュアルスタディーズの3つの視点から評価軸を設定した。

結果として両番組とも障害者の取り上げ方を向上させようという製作側の意思が内容から感じられた。それでも課題が残る内容となってしまうのは、「視聴率」という評価軸が高い壁となっているからだと推測される。これからのマスメディアでは、「みんなが見たいもの」を伝える視聴率とは異なる「知る価値のあるもの」を評価する倫理的な軸を設定し、マイノリティに寄り添う「ケア」の視点を重んじる必要がある。また、当事者にしか理解できない思いや気付くことのできない生きづらさを多くの人に届けるために、マスメディアが当事者メディアと協力することが重要になってくる。